



新春会長インタビュー クルマへの想いをもっと伝えたい

一般社団法人 日本自動車工業会

美しい地球を次の世代に引き継ぐために、 あなたもエコドライブしませんか。

エコドライブをご存じですか。

それは、環境を守るために、いつもの運転をちょっと工夫する、誰にでもできる簡単な運転方法。

たとえば、アクセルをゆっくり踏んだり、ブレーキを早めにゆっくり掛けたり。

ただそれだけで、CO₂の排出量が抑えられ燃費も向上します。穏やかな運転だから、安全運転にもつながります。



いつもの運転に、やさしさをプラス。 **エコドライブ10のすすめ**

7 **タイヤの空気圧から始める点検・整備**
タイヤの空気圧チェックを習慣づけましょう。

1 **ふんわりアクセル「eスタート」**
発進するときは、穏やかにアクセルを踏んで発進しましょう。

4 **エアコンの使用は適切に**
暖房のみ必要なときは、エアコンスイッチをOFFにしましょう。また、冷房が必要なときは、車内を冷やしすぎないようにしましょう。

8 **不要な荷物はおろそう**
運ぶ必要のない荷物は車からおろしましょう。スキーキャリアなどの外装品は、使用しないときには外しましょう。

2 **車間距離にゆとりをもって、
加速・減速の少ない運転**
走行中は、一定の速度で走ることを心がけましょう。

5 **ムダなアイドリングはやめよう**
待ち合わせや荷物の積み下ろしなどによる駐停車の際は、アイドリングはやめましょう。^{※1}
エンジンをかけた後すぐに発進しましょう。^{※2}

9 **走行の妨げとなる駐車はやめよう**
迷惑駐車は、渋滞をもたらし、燃費を悪化させるのでやめましょう。

3 **減速時は早めにアクセルを離そう**
信号が変わるなど停止することがわかったら、早めにアクセルから足を離しましょう。
減速時はエンジンブレーキを活用しましょう。

6 **渋滞を避け、余裕をもって出発しよう**
出かける前に、渋滞・交通規制などの道路交通情報や、地図・カーナビなどを活用して、行き先やルートをあらかじめ確認し、時間に余裕をもって出発しましょう。

10 **自分の燃費を把握しよう**
自分の車の燃費を把握することを習慣にしましょう。

※1 交差点で自らエンジンを止める手動アイドリングストップは、以下の点で安全性に問題があるため注意しましょう。(自動アイドリングストップ機能搭載車は問題ありません)
・手動アイドリングストップ中に何度かブレーキを踏むとブレーキの効きが悪くなります。・慣れないと誤動作や発進遅れが生じます。またバッテリーなどの部品寿命の低下によりエンジンが再始動しない場合があります。
・エアバッグなどの安全装置や方向指示器などが作動しないため、先頭車両付近や坂道での手動アイドリングストップは避けましょう。
※2 -20℃程度の極寒冷地など特別な状況を除き、走りながら暖めるウォームアップ走行で充分です。

安全運転で楽しいドライブ!!

クルマの正しく安全な使い方については <http://www.anzen-untten.com>

JAMA 一般社団法人 日本自動車工業会
JAPAN AUTOMOBILE MANUFACTURERS ASSOCIATION, INC.

〒105-0012 東京都港区芝大門 1-1-30 日本自動車会館

CONTENTS

- 年頭に際して** 2
／一般社団法人 日本自動車工業会 会長 豊田 章男
- 新春会長インタビュー** —————
クルマへの想いをもっと伝えたい 4
／一般社団法人 日本自動車工業会 会長 豊田 章男
／フリーアナウンサー 魚住 りえ
- テーマ** **クルマとIT技術の融合でめざす未来** —————
- クルマとIT技術の融合でめざす未来** 11
／モータージャーナリスト 茂木 康之
- 記者の窓** —————
「子どもが泣かないクルマなら…」 17
／神奈川新聞社 真野 太樹
- Topics** —————
- 平成26年度税制改正大綱について 18
 - 「平成26年自動車工業団体新春賀詞交歓会」開催



表紙イラストレーション

クルマのある風景

にしやま きょう
西山 恭

東京藝術大学 美術学部

午年をテーマにポップでキャッチーなイラストで制作しました。新しい一年の初ドライブのイメージです。

『JAMAGAZINE』では表紙に、美術を専攻している大学生などの皆さんの作品を掲載しています。

年頭に際して

一般社団法人 日本自動車工業会 会長

豊田 章男



新年明けましておめでとうございます。年頭にあたりご挨拶申し上げます。

昨年は、リーマンショック以降、東日本大震災や超円高などの度重なる苦難を乗り越えようとする民間の頑張りを、政府のアベノミクスで後押し頂き、ようやく日本経済が回復に向けたスタートラインに立った年でした。

また、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催決定は、日本に「夢」と「希望」を与えてくれました。

一方、東日本大震災の爪痕は依然として消し去られておらず、復興も道半ばであり、まだ以前の生活を取り戻せていない被災者の方が多くおられます。本年はさらに復興が進展することをお祈り申し上げます。

昨年の世界の自動車市場を見ると、米国市場は好調が続き、欧州市場はようやく回復基調となるなど、堅調に推移しました。他方、これまで急成長を遂げてきた新興国市場に減速感が見られ、本年は予断を許さない状況です。

国内市場については、昨年前半は前年割れが続きましたが、後半には消費マインドの改善などにより、回復の兆しが見えてきました。しかしながらこの中には、本年4月の消費税増税前の駆け込み需要も含まれており、今後の国内市場の動向は楽観できません。

本年は、日本経済が回復基調から持続的成長へと転換を図り、2020年という未来に向けたスタートを切る大変重要な年です。自動車業界としても、日本の基幹産業という気概を持ち、日本の「元気」「笑顔」を取り戻すために邁進してまいります。

当会としては、本年も「国内市場の活性化」「事業環境の改善」「安全・快適で持続可能なクルマ社

会の創造」に注力してまいります。

<国内市場の活性化>

日本の自動車産業の競争力の源泉は、高い技術力を持つサプライヤーや優秀な人材などに代表される強固なものづくり基盤です。このものづくり基盤を守り続けるには、20年以上続く国内市場の縮小に歯止めをかけることが特に重要であり、昨年は、国内市場の活性化に向けた取り組みに注力致しました。

昨秋には、「大学キャンパス出張授業～経営トップが語るクルマの魅力～」と題して、各社トップが大学に赴き、学生と直接対話するという試みを実施致しました。積極的に質問をする学生や、展示車両に笑顔で乗り込む学生の姿をたくさん目にし、私は、「若者は決してクルマに興味がないわけではない」「彼らが目を輝かせるようなクルマを造りたい」という思いを強くしました。

「第43回東京モーターショー」では、国内外のメーカーに初公開のクルマを積極的に披露頂き、ワールドプレミア76台と、非常に注目度の高いモーターショーになりました。加えて、クルマ・バイクを体感する新たな企画である「お台場モーターフェス」を同時開催致しました。東京モーターショーでクルマを見る「静」の楽しみと、お台場モーターフェスでクルマに乗る「動」のワクワク感を一度に感じる事が出来る、言わば、「静と動」の織り成すハイブリッドモーターショーになりました。新たなメディアイベント「Mobilityscape Tokyo」では、会長副会長5人のリレートークにより「日本のものづくりのDNA」などをプレゼンしたのに加え、メーカー14社が協力した、鋼板製の「希望の一本松」の製作・披露など、多くの海外メディアの方々に、日本

のものづくりの底力を感じていただくことができたと思います。

その結果、モーターショーには前回(84万人)を上回る90万人のお客様にご来場いただき、クルマやバイクの魅力を間近でご覧いただくことができました。

本年はモーターショーの休催年ですが、この勢いを絶やすことなく、クルマ・バイクの魅力を様々な形で積極的に発信してまいります。

また、国内市場の活性化に向けては、過重な自動車ユーザーの税負担軽減が大変重要です。昨年末の税制改正大綱で、消費税8%時点における自動車取得税率の一部引き下げ、エコカー減税拡充等が決定され、自動車ユーザーの税負担が一定程度軽減されることとなりました。関係者のご尽力に感謝申し上げますと共に、自動車業界としても、今後も魅力ある商品を投入していくことで国内市場の活性化を図ってまいります。

しかしながら、二輪車、及び対象が限定されたといえ軽自動車が増税されることについては、極めて残念と言わざるを得ません。自動車業界としては、今後、消費税10%段階において、自動車取得税の確実な廃止を実現するとともに、今回提示された環境性能課税が、自動車ユーザーの確実な負担軽減に資する制度となるよう、引き続き活動してまいります。

<事業環境の改善>

国内のものづくり基盤を守るためには、国内の事業環境を改善していくことも重要です。これまで私たち自動車業界は、歴史的な超円高をはじめとする、いわゆる「六重苦」の解消を政府にお願いしてまいりました。安倍政権発足以降、政府の大胆な政策により、最大の懸案であった超円高は是正されてきました。政府の取り組みに深く感謝申し上げます。

一方、残された課題も存在します。自動車業界としては、自由貿易協定の更なる推進や、法人税の引き下げ、安全・安価な電力の安定的供給などを、引き続き政府に強く求めてまいります。

<安全・快適で持続可能なクルマ社会の創造>

「高齢化」や「エネルギー・環境問題」など、私たち自動車業界が直面する課題は、日々その深刻さを増しています。

私たち自動車業界は、政府が進める「世界一安全な道路交通」の実現に向けた取り組みを推進しております。今後、高齢化が進展する中においても、交通事故者数が着実に減少していくよう、私たち自動車業界として、クルマとインフラ、クルマとクルマ、クルマと人がつながることで実現する自動運転技術の実用化等、様々な安全技術の導入・普及により、高齢者を含む全ての人の安全・快適かつ自由な移動を実現したいと考えております。

また、「エネルギー・環境問題」に対しても、電気自動車、プラグインハイブリッド車、燃料電池自動車、クリーンディーゼル車などの次世代自動車の開発・普及を積極的に行ってまいります。電気自動車や燃料電池自動車の普及には、充電インフラや水素供給インフラの整備が不可欠です。自動車業界としても、クルマの技術開発とともに、インフラ整備についても関連業界と協力し、「安全・快適で持続可能なクルマ社会の創造」に向けて邁進してまいります。

このような新しい分野において、日本発の技術で世界をリードしていくためには、私たち自動車業界が未来を切り開くという気概を持って技術革新に取り組むのはもちろんのこと、これら社会的課題の解決を、成長戦略の中核に位置づけ、産官学がオールジャパンで取り組んでいくことが重要です。

今後とも政府に対し、「世界で一番イノベーションが起りやすい国=日本」の実現に向け、成長戦略の着実な実行を強く求めてまいります。

<おわりに>

2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し、私たちは世界に向け日本の素晴らしさを発信していく絶好の機会を頂きました。これからは、様々なことが、2020年に向け動いていくことになると思います。

2020年までの6年間で、日本が明るい未来に向け、着実に歩を進めていくことを期待しております。

私たち自動車業界としても、2020年という一つの「納期」に向け、「夢のある豊かなクルマ社会」「未来のモビリティ」の実現に向けて取り組んでまいります。

今後とも皆様方の一層のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

クルマへの想いをもっと伝えたい

豊田 章男 [一般社団法人 日本自動車工業会 会長]

聞き手：魚住 りえ [フリーアナウンサー]



クルマ・バイクの楽しさを

「東京モーターショー」

魚住：あけましておめでとうございます。

豊田：おめでとうございます。

魚住：昨年は会長ご自身が、東京モーターショーをはじめ、クルマ・バイクファンを広げる試みに積極的に取り組まれたという印象があります。手応えはいかがでしたか。

豊田：第43回となった東京モーターショーでは、前回の84万人を上回る90万人のお客様にご来場いただきました。

前々回はリーマンショックの後、また前回は東日本大震災の後での開催ということで、厳しい状況にありながらも日本の自動車業界は心をひとつにして取り組んできたことが、今回につながっていると思います。そして今回のショーも、ひとり

でも多くの方に「クルマって、バイクっていいよね」と感じていただき、またクルマ・バイクの明るい未来や「日本の元気」を感じていただけるショーにしたいと思って取り組みました。

「東京モーターショー、おもしろそうだね」というメッセージが広がって、ご家族連れや若いカップルも多く、皆様が笑顔で楽しんでおられた姿を目にしたときは、うれしかったですね。本当にありがたいと思いました。

魚住：世界で初めて公開されたクルマもたくさんあったそうですね。

豊田：はい。国内外のメーカーに世界初公開のクルマを積極的に披露していただいて、ワールドプレミア76台という、非常に注目度の高いモーターショーになりました。

それから、今回初めて試みた「プレビュー・ナ

イト」は一般公開日の前日に実施したもので、限られた人数でゆっくりとじっくりと会場をご覧いただき、新たなクルマ・バイクの魅力をより感じていただけたのではないかと思います。

ショーテーマである「世界にまだない未来を競え。」のもと、日本に14社ある自動車メーカーのものづくりの技術を世界に発信しようということで、持てる技術と情熱のすべてを注いだクルマたちが揃って、本気で競い合い、日本のものづくりの底力の一端を発信できたと思います。

また、メーカー間の垣根を越えて、各社の共同作業で「希望の一本松」*を作製し、海外のメディアが集まるイベントや、モーターショーの会場でも展示して日本の“技能の力、匠の技”を見ていただきました。

魚住：会長がおっしゃったように、自動車業界が心をひとつにして、この祭典を盛り上げたという感じがしますね。

豊田：本当にそうだったと思います。前々回、前回と、苦勞して開催してきた経緯があったからこそ、またその蓄積があったからこそだと思います。

「SMART MOBILITY CITY 2013」での訴求

魚住：会場では、普段はあまり乗る機会のないパーソナルモビリティや超小型モビリティなどの試乗会があったと聞いています。

豊田：それは「SMART MOBILITY CITY 2013」



*東日本大震災のとき7万本の中でたった1本だけ生き残った陸前高田市の「奇跡の一本松」。そのレプリカを各社の若手技術者たちが銅板で再現した。

ですね。クルマが情報通信やエネルギーなど、社会システムとネットワークの重要な役割を持つことで、くらしの“安心・安全”や“利便性・快適性”を充実させる様子を見ていただきました。

自動車メーカーはもちろん、情報通信や電子機器、住宅などいろいろな企業が出展し、最先端の製品や技術を紹介しました。

こうした提示をすることによって、クルマを核にした「スマートコミュニティ」や「ITS」における日本の技術の先進性を国内外に示すことができたのではないかと思います。

魚住：業種・業態の枠を超えて、とのことですが、他の業界や他のイベントとの連携も行われましたね。

豊田：去年は、10月の初旬にアジア最大級の最先端IT・エレクトロニクスの総合展である「CEATEC JAPAN」が、また同じ月の中旬には9年ぶりの日本開催となった「ITS世界会議東京」が、そして11月の下旬から「東京モーターショー」という3つのイベントが立て続けに開催されました。

私たちはこれをクルマとITが連携するチャンスととらえて、3イベントで連携し、未来のモビリティ社会のあり方を、そして「日本」を世界に向けて発信しました。

新たに取り組んだ「お台場モーターフェス」

魚住：モーターショーを盛り上げるためのイベントや若者たちにアプローチするイベントも積極的に行ったようですね。

豊田：今回新たな取り組みとして開催した「お台場モーターフェス」は、東京モーターショー開催一週間前の11月16日（土）・17日（日）と、モーターショーの開催期間中に行いました。

これは展示されたクルマを見るモーターショーの「静」に対して、クルマの「動」の部分を感じていただくために開催したもので、39万人の方々に来ていただくことができました。

初日の16日には、昭和を彩った名車、レーシングカー・バイク、ラリーカーなど60台以上が公道をパレードしました。

私もドライバーとして参加して、あんなに多くのクルマ・バイクと一緒にパレードで公道を走ったことを本当に夢のようだと感じました。

また、こういうイベントが自動車文化をつくる第一歩になるのだという思いを強くしました。

魚住：レーシングカーなどと一緒に公道を走るという体験は素敵なことだったのでしょうか。

一方で、クルマへの関心が薄いと言われる若い世代に対して、自動車の側からアプローチをなさいましたね。各社の経営トップの方々が大学に行かれて講演され、学生の「生の声」に接したとお聞きしています。

自動車から若者に近づいていった

「大学キャンパス出張授業」

豊田：若い世代の方々にも、クルマの魅力を感じていただこうと、関東と関西の8つの大学と連携して、乗用車メーカー各社のトップが大学キャンパスで講演しました（「大学キャンパス出張授業

～経営トップが語るクルマの魅力～）。各メーカーのトップということだったので、私はトヨタの社長として、明治大学にうかがいました。

魚住：お気持ちは伝わりましたか。

豊田：伝わったと思います。

学生の皆さんは、大企業のトップというのと、どうしても「上から」的な発言のイメージを持っておられるでしょうから、カジュアルなファッションで第一印象を変え、私から話すのではなく質問に答えるという形式にしました。講演後「クルマ、いいよね」というコメントをいただきました。

魚住：大企業のトップの方のお話を聴けるだけでも貴重な体験だと思いますが、質問をするとなると学生の方々は緊張されたでしょうね。

豊田：そうですね。ですから司会者の方には事前

に、学生が困ったらフォローするようにお願いしましたが、結果的にそういうことは起こりませんでした。「最近の若い者は…」とよく言われますが、むしろ若い人も非常にしっかりした考えを持っている、と素直に感心しました。

私はアナログ世代、彼らはデジタル世代ですので、そういう新しいものに対してわれわれシニア層は学ぶものがあります。また逆にシニア層が若者に教えれば良いこともあります。そのようにしてお互いの強みを生かせば、人間としてより良く成長できるのではないかと思います。

「若者のクルマ離れ」という前に、シニア層も一生懸命若者に近づくことが必要だと思います。

魚住：クルマを持たないという若者が増えている中で、会長の、また各社トップの方々のお話を聴いて、学生の皆さんは「クルマっていいな、素晴らしいな、ほしいな。」と思ったでしょうね。

豊田：そう願っています。この企画は私たち自動車業界にとっても、学生の皆さんの「生の声」を聴いて、その感性に直接触れることができた素晴らしい機会になったと思います。

積極的に質問をしてくださって、展示してあるクルマに笑顔で乗り込む学生の皆さんの姿をたくさん目にして、私は「若者は決してクルマに興味がないわけではない」と実感しましたし、「彼らが目を輝かせるようなクルマをつくりたい」と強く思いました。



直面する課題と対応

自動車諸税の簡素化・軽減

魚住：クルマを持ちたいなと思った学生さんにとっても私たちユーザーにとっても、クルマが買いやすく、保有しやすい状況になることが大切です。

自動車工業会は他の自動車関連団体とともに自動車に関する税について、長年にわたって見直しを訴え続けていらっしゃいますね。

豊田：これは自動車ユーザーを優遇してほしいということではなく、アンフェアな状況を改善してほしいということなのです。日本の自動車ユーザーは国際的にみても非常に重い税負担となっています。

昨年末にまとめられた税制改正大綱では、消費税率8%引き上げ時の車体課税について自動車取得税率の一部引き下げ、エコカー減税の拡充などが決まりました。これは自動車ユーザーの税負担を一定程度軽減するものであると評価しています。

しかし、軽自動車や二輪車をはじめ、消費増税を加味するとすべてのクルマが増税となったことについては、極めて残念と言わざるを得ないと思います。

魚住：2015年10月には消費税率が10%に引き上げられますが、自動車関係諸税はどうなるのでしょうか。

豊田：私どもとしては、消費税率が10%となる段階で、自動車取得税の廃止が確実に実現するように、業界、一枚岩となって働きかけていきます。

また、環境性能に応じた課税が導入されることになりましたが、自動車ユーザーの負担軽減につながる制度となるよう、引き続き活動していきたいと思います。あわせて自動車税を含めて、いかにエコでグリーンな税制の再構築をしていくのか、また需要創出の好循環とどのように両立させていくのか、自動車産業としても具体的な提案をしていくなど、一緒に知恵を出してまいりたいと思います。

自由貿易の推進について

魚住：TPPについては昨年中の妥結はなりませんでした。その他のEPA/FTAを含めて自由貿易についてどのようにお考えでしょうか。

豊田：グローバルにビジネスを行っている自動車業界にとっては、国際競争力を確保するうえで、諸外国との自由貿易協定の推進が重要です。

TPPは残念ながら各国間の調整がつかず、昨年内の合意が持ち越されましたが、アジア太平洋地域における自由貿易の進展、投資の円滑化やルールづくりの観点から、業界にとって意義のある協定が早期に妥結されるよう強く望んでいます。

また去年は、HEU EPAやRCEP（東アジア地域包括的経済連携）などの交渉も開始されました。

こうしたEPA/FTAについても、日本政府には、今後とも積極的な取り組みをお願いしたいと思います。

日本の「ものづくり」の維持に向けて

魚住：会長は日本のものづくりについて、その重要性を常日ごろ説いていらっしゃいますが、アベノミクスの効果はあったのでしょうか。

豊田：はい。去年はリーマンショックや東日本大震災、超円高など、いくつもの苦難を乗り越えようとする民間のがんばりを、「金融政策」、「財政政策」、「成長戦略」の「3本の矢」を柱にして後押ししていただいたと思います。しかし、日本経



済は回復に向けたスタートラインに立った段階です。これからこの流れを確実なものにするためには、3本目の矢である「成長戦略」(日本再興戦略)の取り組みで、民間の活力を引き出していくことが重要だと思っています。

こうした状況のなか、日本のものづくり基盤を強化して、日本発のイノベーションで世界をリードし続けるために、競争力のさらなる向上や新技術・新商品の開発などに、全力で取り組んでいきたいと考えています。



クルマというモビリティ

魚住: 新たな技術というと、去年は「自動運転」のクルマが話題となりました。各社の開発も加速していると思いますが、これについてはどのようにとらえていらっしゃいますか。

豊田: クルマというモビリティの良さは、ドライバーの意思で自由に道を選び、自由に止まることができるということにあります。

「自動運転」は、あくまでもドライバーの運転技術、疲労軽減、危険の回避をサポートする位置づけの先進技術であり、自動車メーカーは技術開発を積極的に進めていますので、この流れは今後とも加速していくでしょう。

その延長線上に、将来「自動走行システム」も入ってくるのだろうと思います。

但し、最終的な責任はドライバーの側にあると

いうことを皆さんには認識していただきたいと思っています。

魚住: 当然のことながら、自動運転だからといって、すべて委ねて無責任でいてはならないということですね。

豊田: 自動運転の最終的な目標はあくまでも交通事故がゼロになることです。クルマとインフラ、クルマとクルマ、クルマと人が協力して、安全な世界を作っていく必要があると思っています。

もうひとつ、クルマに求められる要素として、私自身は「楽しくなければクルマじゃない」と考えています。数あるモビリティの中で、クルマというのはエモーショナルな存在であるべきだと思うのです。

「愛車」と言いますね、「愛犬」とか。クルマの前に“愛”をつけてくれていることを深く受け止める必要があります。私たちはそういう存在のものを提供しているのです。その思いを失うことなく、より強めることによって、皆さんの“愛車”になるのではないのでしょうか。

道がクルマをつくっている

魚住: 会長は、よく「もっといいクルマをつくりたい」とおっしゃいますね。

豊田: もともとは道がクルマをつくるのです。

日本の市町村道では幅3.8メートル以下の道路が約85%と言われています。軽自動車をはじめ、小さいクルマでないと行き来しにくいような道が多いことから、日本では軽自動車というクルマも育ってきたのです。

ドイツなどを通っているアウトバーン、あるいはアメリカのような広い道に広い駐車場、そういうシーンと比べるとよくわかりますね。

魚住: それぞれの国の道によって、クルマの個性も変わるのですね。

豊田: お国柄、ということもあるとは思いますが、やっぱり道だと思います。

道がクルマをつくるのですが、これこそがいいクルマだという百点満点の回答はないのです。それでも、そこに向かって絶えず努力していくことが重要です。だからこそクルマというものは100年以上続いて、まだ進化しているということだと思います。

魚住：以前、会長が「クルマは人生とともにある」とおっしゃっていたのを聞いたことがあるのですが、とても印象的な言葉ですね。

豊田：私の人生そのものですよ、クルマは。

魚住：クルマという存在が、人に寄り添って、ずっと一緒にいるものだというのを訴えかけてくるような感じがします。

豊田：クルマというのは、それぞれの人にいろいろな思い出がありますね。人生のある時期において、こういうクルマに乗っていて、こういう景色を観ながら、こういう音楽を聴いていた。横にだれかが座っていた、とか。そういうストーリーが、いつもクルマにはあると思います。

クルマは確かに移動手段であり、工業製品です。しかしそれ以上に、「このクルマが買える人間に成長したい」とか、「このクルマに乗ってこういう夢を実現したい」とか、クルマがバリューを新しく提供してくれる、そういうこともあると私は思うのです。

魚住：クルマと人が寄り添う関係、お互いが成長し合う関係というのは、とても素晴らしいですね。今日お話をうかがっていて、クルマというのはそういう存在なんだなあ、とあらためて思いました。

ぶれない軸を持ち続ける

魚住：クルマの楽しさやそれを伝える取り組みを中心に、業界の課題などについてうかがってきました。自動車の今後が楽しみになりますが、今年はどういう年にしていきたいと思われていますか。

豊田：個社の話を含んで恐縮ですが、トヨタの社長になってから、去年は初めて大過なく一年を過

ごすことができた年でした。

ここ数年、私にとって平穩無事な年は一度もなかったのです。平穩無事というのは、毎日働いている中で、毎日生産できて、毎日販売できること、まずはその状態を私は願ってきました。ところが一度もそういう年はありませんでした。昨年ようやくそれが初めて叶いました。そしてマイナスではない地点に立ち、「さあ、これから」という思いを強くしております。

とはいえ、企業には、いいときも、悪いときもあります。そういう中でも「ぶれない軸」を持ち続けたいと思っています。

もっといいクルマをつくりたいという軸、人から選ばれる企業になりたいという軸、クルマづくりに関して社会に貢献したいという軸、これらはどのような外部環境であれ、ぶれることのないようにしたいと思います。

また、そのように行動していくためには「勇気」を持つことが大切です。頭ではわかっている、一歩踏み出すためには勇気が必要なのです。

魚住：では最後に、今年一年の決意のほどをお聞かせください。

豊田：先ほど申し上げたように、去年はようやく日本経済が回復に向けたスタートラインに立った年で、また2020年のオリンピック・パラリンピック





クの東京開催が決まり、日本に「夢」と「希望」がもたらされた年でした。

今年はその流れを大切にしつつ、回復基調から持続的成長へと転換を図りたいへん重要な年です。

自動車業界としても6年後の「納期」に向けて、「夢のある豊かなクルマ社会」「未来のモビリティ」の実現に向けて取り組んでいきます。

魚住：本日はお忙しいところ、貴重なお時間をいただきましてたいへんありがとうございました。

豊田：こちらこそ、どうもありがとうございました。

(とよだ あきお／うおずみ りえ)

魚住りえさんのプロフィール

大阪府箕面市生まれ。

3歳から19歳まで広島県広島市で育つ。

1995年慶應義塾大学文学部仏文学科卒業。

日本テレビ入社。「所さんの目がテン！」のアシスタントや「ジパングあさ6」のキャスターを担当。

2004年日本テレビ退社。

同年から、テレビ東京「ソロモン流」（前身「ソロモン王宮」）のナレーターを、また2013年より日本テレビ「嵐にしゃがれ」ナレーションレギュラーを現在も務めている。

現在はフリーアナウンサーとして活動中。

また、コミュニケーションや話し方、夢・チャレンジなどについて講演活動も行っている。

スピーチトレーニングスクール「魚住式スピーチメソッド」を立ち上げ、講師としてビジネスマンに向けて音読・朗読を通して話し方を磨くための指導を行うなど、活動の幅を広げている。

著書に『女子アナにも程がある』（共著／日本テレビ放送網）。

クルマとIT技術の融合でめざす未来

モータージャーナリスト 茂木 康之

はじめに

2013年秋に開催されたCEATEC JAPAN、ITS世界会議 東京2013、東京モーターショーの3大イベント。日本の製造業の両輪であるIT・エレクトロニクス産業と自動車産業が連携することで、日本の技術力を世界に発信した。そこで、見えてきた自動車産業における現在と未来をレポートする。

IT・エレクトロニクス分野との融合

2013年10月1～5日まで幕張メッセで開催されたCEATEC (Combined Exhibition of Advanced Technologies) JAPAN 2013。最先端IT・エレクトロニクス総合展として14回目を迎えた今回のテーマは、「Smart Innovation - 明日の暮らしと社会を創る技術力」。IT・エレクトロニクス技術の



CEATEC JAPAN 2013

革新と他分野との融合によるスマート化で実現する豊かな暮らしと、安心・安全で利便性の高い社会を世界に向けて発信した。会場内には、来場者がユーザーとしての視点で新たな体験（未来）をできる展示を各企業が展開。それらは、次世代映像技術、モバイルコミュニケーション、スマートハウス、スマート家電、クラウドサービスなど、幅広い分野に及んでいた。しかも、これらがシームレスでつながることにより、さまざまな生活シーンを融合させ、より豊かで快適な生活をめざすという。当然、この中には現代社会において欠かせないアイテムのひとつとなっているクルマも含まれており、IT・エレクトロニクス産業と自動車産業との連携が今後重要になっていくことが実感できたといえる。

具体的に見ていくと、IT・エレクトロニクスとの融合によって現実化されつつあるのが、クルマの自動運転化や安全・快適性のアップだ。かつて、映画や漫画の世界で描かれていたクルマの自動運転が現実のものになりつつあり、そこには日本のIT・エレクトロニクス技術が欠かせなくなっている。クルマの技術といえば、かつてはエンジン、シャシーなどは機械工学分野と言われていたが、現在ではそれら走行制御部分においても電子装置



CEATEC JAPAN 2013

は使用されている。もちろん、普及が進むハイブリッドカーや電気自動車などにおいて電子工学分野は欠かせない技術領域となっており、電子装置の進化がなければ実現できなかった機能も多々あるといえる。発展を遂げたのは、クルマ本体や制御関係だけでなく、車内のインテリア関係の各パーツにも表れている。例えば、電子メーターもIT・エレクトロニクスとの融合で生まれたものであり、ドライバーを目的地まで安全・快適に導いてくれるカーナビゲーションも例外ではない。

そして、この延長線上にあるのがクルマの運転支援システムや自動運転で、これが現実のものとなるとユーザーはどのような恩恵を受けられるのか実感してもらうため、CEATEC JAPAN 2013の会場内には走行デモ・試乗エリアが設けられた。そこでは、トヨタ自動車、本田技研工業がパーソナルモビリティ機器の試乗、日産自動車は自動運転のデモを展開。トヨタ自動車は、車輪径を小さくして立ち位置を低くすることで安定感に優れたパーソナルモビリティ用パートナーロボット「Winglet」の試乗を行い、実体験した人は乗りやすさに感動していた。また、本田技研工業は玉乗

りのようなパーソナルモビリティ「UNI-CUB」の試乗を行い、バランス制御を本体が行う不思議な乗り物に試乗した人からは感嘆の声が挙がっていた。一方、日産自動車は人が運転する有人運転のクルマと自動運転のクルマを同時に走らせ、交差点や駐車車両に遭遇した場合、自動運転のクルマがどのように反応するかのデモンストレーションを実施。信号機のない交差点では、自動運転のクルマが交差点を通過するクルマを待って走行し、路肩に駐車車両があった場合は前方にクルマがないことを自動的に判断して安全に追い越すといったデモに、見学者からは感心とともに驚きの声が聞かれた。

また、会場内にはインフラに関するものの展示も多く、中でも注目を集めていたのが電気自動車、プラグインハイブリッド自動車用の充電ステーションだ。これらクルマの普及には、充電ステーションの拡大が欠かせないため、有償のステーション展開に関する提案を行っている企業もあり、課金サービスなどの多彩なサービスを実現するクラウドサービスを提案していた。ネットワークやクラウドサービスなどの通信分野に弱い自動車関連



CEATEC JAPAN 2013

企業が、通信分野を専門とする企業と手を結ぶことで、新たなインフラが展開されていくことも期待されている。

世界中のITS技術が一堂に会す

そして、2013年10月14～18日には東京国際フォーラムや東京ビッグサイトなどで、ITS (Intelligent Transport Systems・高度道路交通システム) 世界会議 東京2013が開催された。今回で20回目を迎えたITS世界会議は、世界中の国や地域から65カ国が参加し、出展は世界の約30カ国・地域から、企業・団体・自治体・省庁・大学など計238社／団体に及び、ITS参加団体は欧米、中国・台湾・韓国を含むアジア太平洋地域のすべてと、世界中のITSが一堂に会した。

この東京会議で注目を集めたテーマは、高度運転支援システム、自動運転、ITSビッグデータ。会議セッションは、専門家による国際会議だけではなく、市民参加の国際会議も開催され、熱い議論が交わされた。そして、着々と準備やテストが進んでいるインフラシステムを来場者が体験できる



第20回ITS世界会議 東京 2013



第20回ITS世界会議 東京 2013

ショーケースでは、路車間通信による安全運転支援システムである次世代DSSS、ドライバーに車両接近情報を提供するシステムの通信利用型先進安全自動車、2011年から全国の高速道路でサービスが開始されている路車協調システムのITSスポットサービスなどを展開。また、東京ビッグサイトの近隣にある青海西臨時駐車場K区画では、高度運転支援・自動運転のデモンストレーション「体験しよう！ “自動運転に向けて” inお台場 - 世界のクルマが集合 -」を実施。ここは、世界の主要自動車会社の最新技術を体験できる場となっており、多数の一般の人々が参加。

主要自動車メーカーのデモンストレーションを見ていくと、まずトヨタ自動車はミリ波レーダーとステレオカメラを組み合わせることで、人を認識する能力を高めた安全支援システム、歩行者衝突回避支援型プリクラッシュセーフティシステムを出展。本田技研工業はぶつからないクルマをコンセプトに開発したシティブレーキアクティブシステムとITS技術を活用した安全運転支援システムの試乗会、富士重工業は先進運転支援システム「アイサイトver.2」プリクラッシュブレーキ試乗



第20回ITS世界会議 東京 2013

デモなどとなっていた。

ここで参加者は、将来的な技術とともに、すでに実運用が始まっているシステムを実体験することにより、最新の運転支援システムと自動運転を身近な存在として感じる事ができていた。興味を持つ人が増えることで、クルマの普及と進化にも大きな影響力を与えることができたはずである。

近未来のモビリティ社会を体感

3大イベントの最後を締めたのが、2013年11月22日～12月1日まで東京ビッグサイトで開催された第43回東京モーターショー2013。今回のテーマは「世界にまだない未来を競え。」で、世界12カ国から計178社・181のブランドが出展。しかも、車両部門全体でワールドプレミア76台、ジャパンプレミア81台が展示されたこともあり、会期中の総来場者数は前回（2011年）の84万2600人を7%上回る90万2800人を記録。まさに、今回の東京モーターショーへの関心度が高かったことを示しており、未来のクルマ社会がより魅力的なものになるということを東京から国内外へ発信できたといえる。

会場内には、今回のテーマに挙げられた「未来を競え」を具現化した場も設けられた。それが、近未来のモビリティ社会の姿を体感してもらうための「SMART MOBILITY CITY 2013」だ。「KURUMA NETWORKING…くらしに、社会に、つながるクルマたち」をテーマに、それをわかりやすく紹介した展示とともに具現化する最先端の製品や技術などを民間企業・関係諸団体が先進技術・製品のプレゼンテーションを行ったエキシビション、国内外の次世代自動車の試乗やITSを体験できるテストライド、国内外の専門家・企業経営者・技術者などが最先端の技術開発動向や具体的な導入事例を紹介したカンファレンスの3つで構成されていた。その中でも注目を集めていたのが、国内外の次世代モビリティの魅力を実験できるテストライドコーナーで、パーソナルモビリティや超小型モビリティの体験走行や高度運転支援システムのデモンストレーションを多くの来場者が体感。前方車両のナンバーを認識して自動的に追跡する追従走行、自動駐車など、クルマの新たな魅力に触れることで、近未来のモビリティ社会を身近に感じ取っていた。



第43回東京モーターショー 2013

環境対策、
交通事故軽減をめざして

ここまで見てきたように、クルマ、ITS、IT・エレクトロニクスと各分野における世界に向けて発信する展示披露・会議が、時と場所は違っても共通認識をもって開催された意義は大きい。クルマとITSは、移動手段と交通システムという共通項があるため違和感はないが、IT・エレクトロニクス分野はどちらかというところホームや通信手段の世界というイメージが強かったはずである。しかし、最先端の技術を開発していくにはクルマ業界に限らず、IT・エレクトロニクス分野との関係は切っても切れない関係になっているのだ。特にクルマ業界で注目されているのが、今回の3大イベント会場で注目されていたIT・エレクトロニクス分野との融合で生み出される高度運転支援システムである。

この高度運転支援システムの開発において、各社が力を注いでいるのが自動運転技術に関するものといえる。世界に誇るクルマの技術、IT・エレクトロニクス技術が融合することで成し遂げら



第43回東京モーターショー 2013



第43回東京モーターショー 2013

れる最先端技術であり、車両間における通信技術を利用してさまざまな応用、発展をみせているといえる。もちろん、そこにはカメラや制御ソフトなどが高度に組み合わせることで、車間距離を自動的に制御する、走行ラインを自動算出して自律走行するクルマなども含まれる。

日本の自動運転に関する技術力は、3大イベントを見てもわかるように、かなり高いレベルにある。だが、それは決して目的地まで自動的に移動することで、ドライバーの運転する楽しみ、喜びを奪うものではない。各業界が手を結んで取り組んでいる高度運転支援システムの目的は、交通渋滞の解消、交通事故の軽減などにあるのだ。クルマの普及に併せて、交通インフラの整備も随時行われているが、イコールと言える状況にはない。都市部における慢性的な交通渋滞、交差点における出会い頭の交通事故、渋滞時の追突事故など……。これらを解決する手段のひとつとして注目されているのが、自動運転などを含む高度運転支援シス



第43回東京モーターショー 2013

テムなのである。

それに関わる技術については、官民一体となって進められる一方で、各社でも取り組みが行われている。これにより、ドライバーを幅広い場面で的確にサポートし、安全運転を支援することをめざしてもらいたい。さらに、年齢層に合わせた最適な高度運転支援システムが提供されるようになれば、安全性が高いモビリティ社会の実現も可能となる。特に、高齢化社会となりつつある現在、公共交通が発達していない地域においてクルマは重要な足となっている。そのような人も、安心してクルマを活用することができれば、豊かな生活をクルマがサポートしていくことができるはずである。逆に若年層においては、未熟な運転技術を



第43回東京モーターショー 2013

サポートしていくことで、運転する楽しみ、運転することで得られるワクワク感を得られるであろう。

まさに、未来の交通環境、クルマに求められているものは、安全性、環境対策を高めていく機能、知能と言えるのではないだろうか。

(もぎ やすゆき)



第43回東京モーターショー 2013

「子どもが泣かないクルマなら…」

真野 太樹
神奈川新聞社

◇10数年前、父と一緒に買ったクルマを実家に置いてきてから、サツ回りや支局勤務のときに取材用のクルマを与えられた以外は、クルマを持ったことはない。家のローンはあるし、駐車場代も高い。レンタカーはいろいろ試したものの、どうも使い勝手が悪い。しかし、犬を飼い、娘も生まれ、「クルマがあれば便利だなあ」と思っていたところ、2年前に横浜市内の自宅近くに、カーシェアリングのステーションができた。これだと思い、その日のうちに会員になった。

◇カーシェアは便利だ。安いし、スマホで簡単に予約でき、ガソリン代も必要ない。拠点も続々と増え、コンパクトカーやハイブリッド車、高級輸入車まで、気分好きなクルマに乗れる。交通エコロジー・モビリティ財団の2013年1月の調査では、国内のカーシェア会員数は前年比7割増の約29万人。その後も最大手タイムズカープラスを中心に、市場が急拡大しているのも頷ける。

◇ところが、快適なカーライフを楽しんでいたから難敵が現れた。2歳4カ月の娘だ。1歳を過ぎたころから、チャイルドシートを嫌がるようになり、車内で泣き叫ぶ。お菓子やおもちゃで気を引いたり、歌ったり、あの手この手で試みたものの、チャイルドシートを見ただけで、拒絶するようになった。「しばらくようすを見よう」と、妻と話し合ったのが1年前だ。

◇この1年は、クルマのない生活に戻ったのだが、買い物に行ったり、実家に帰ったりも足が遠のく。妻のママ友でも、同じようにあきらめてい

るケースは多いらしい。泣こうが、わめこうが、乗せ続けていると泣き疲れて寝て、最後は子どももあきらめる、とも聞いた。そろそろ再チャレンジを、と思うのだが、「クルマ、乗りたい?」と聞くと、「いやー」と即答する。

◇ある日、娘と歩いていると、タクシーを見て、「ママと乗った」とうれしそうに言う。チャイルドシートが要らないので気に入ったようだ。でも、旅行中に何度か乗せていたら、「タクシー乗る?」と聞くと、「おなか痛い」とむずかるようになってしまった。最近、テレビでクルマのCMを見ただけで、「おなか痛い」と大騒ぎしている。

◇それでも、女の子にはクルマのアニメやキャラクターは好きなようで、「ロボカーポリー」や「カートくん」を喜んで見ている。ホンダの新車発表会で配られた「フィット」の青いミニカーを渡すと、街で青いクルマを見かけて「いっしょだー」とうれしそうにしている。遊園地のゴーカートも、「もう一回」「もう一回」と、何度乗っても飽きないようだ。次は、最近、横浜の街をよく走っている、日産自動車の超小型モビリティのカーシェア「チョイモビ」を試してみようかと思っている。

◇「子どもが泣かないクルマ」が開発されれば画期的だ。待機児童対策などは各地で盛んだが、子どもが泣かないチャイルドシートやクルマの開発への援助も、最高の子育て支援策だし、そういうクルマがあれば、間違いなく売れると思うのですが…。

(まの たいき)

平成26年度税制改正大綱について

2013年12月12日

一般社団法人 日本自動車工業会
会長 豊田 章男

この度、与党・税制改正大綱において、車体課税に関して難航していた自動車取得税率の一部引き下げ、エコカー減税の拡充等が決定され、自動車ユーザーの税負担が一定程度軽減されることとなった。関係者のご尽力に感謝したい。

自動車メーカーとしては、今後も魅力ある商品を投入していくことで、国内市場の活性化を図ってまいりたい。

しかしながら、二輪車、及び対象が限定されたとはいえ軽自動車の増税については、残念と言わざるを得ない。

当会としては、今後、消費税10%段階において、自動車取得税の確実な廃止を実現するとともに、今回提示された環境性能課税が、自動車ユーザーの確実な負担軽減に資する制度となるよう、引き続き活動してまいりたい。

「平成26年自動車工業団体新春賀詞交歓会」開催



豊田自工会会長

一般社団法人 日本自動車工業会、一般社団法人 日本自動車部品工業会、一般社団法人 日本自動車車体工業会、一般社団法人 日本自動車機械器具工業会の自動車工業4団体による新春賀詞交歓会が、去る1月7日（火）、グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミール「崑崙」にて開催され、招待者及び関係者合わせて約1,800人の方に来場いただきました。当日は、茂木経済産業大臣、太田国土交通大臣もお越しになり、ごあいさつを頂戴しました。

主催団体を代表して豊田自工会会長があいさつを行い、「本年は日本経済にとっても自動車産業にとっても、持続的な成長に向けた力強い一歩を踏み出すための大変重要な年になる。」と述べました。また、「2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し、大きな夢を与えていただいた。」とし、「未来のモビリティ社会にむけた提案をすべく、皆様と知恵を絞り、ともに汗をかいてまいりたい。」と表明しました。

さらに、本年も事業環境の改善および国内市場の活性化に向けた取り組みに注力すると強調しました。また車体課税については、自動車取得税の確実な廃止を求めていくこと、あわせてエコでグリーンな税制の再構築と需要創出の好循環との両立に向けて具体的な提案をしていく考えを示しました。



会場の模様

自動車図書館の沿革と利用案内

日本自動車工業会がある日本自動車会館の1階には自動車関連の資料が収蔵してある図書館があります。前身は自動車工業振興会図書館で、昭和45年に開設という伝統のある図書館です。約13,000冊の図書を所蔵しており、どなたでもご利用いただけます。会館にお越しの際は、ぜひ自動車図書館にお寄りください。

所蔵資料など

自動車産業と車両に関する資料を中心に、幅広く所蔵しています。また雑誌のバックナンバーもご覧いただけます。その他、交通安全やモーターショーの記録を綴ったビデオの視聴や貸出しも行っております。

◇図書の分類◇ 総記（自動車、自動車工業、関連工業、産業・資源、白書）、交通（都市・交通、運輸、道路、新交通システム、交通事故）、歴史（自動車工業史、自動車会社史、自動車人伝記、交通・運輸史、関連工業史、車両史、自動車博物館、その他）、年鑑（自動車、その他）、技術（自動車工学、構造・整備、カーデザイン、安全・公害、その他）、統計（自動車、交通・運輸、産業・資源、動向調査、その他）、経営（自動車工業、ディーラー、部品工業、その他）、型録（乗用車、商業車、二輪車、諸元・形式、その他）、競技（解説一般、スポーツカー、スピード記録、その他）、事典（用語・一般、人名・企業、法律、その他）、時事（新聞縮刷版、編年史）、ショー（規定、報道記事、その他）

ご利用について

受付でお名前をご記入いただければ、どなたでもご利用いただけます。筆記用具・ノート以外はお持ち込みできませんので、備え付けのロッカーへお預けください。図書館は開架式ですので、資料は自由にお手に取っていただけます。閲覧席が16席設けてありますので、ゆっくりとご覧ください。



開館時間 : 平日 午前9:30~午後5:00

休館日 : 土・日・祝日、年末年始

コピー料金: モノクロ1枚10円 カラー1枚50円

貸出 : 貸出はビデオのみになります。図書は貸出しておりません。

フォトサービス: 1970年までの国産車のモノクロ写真を、プリント版にてお受けしております。

●お問い合わせ: 一般社団法人 日本自動車工業会 自動車図書館 TEL 03-5405-6139

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-30 日本自動車会館1階 (地図参照)

・JR線 浜松町駅北口 徒歩8分

・地下鉄 都営三田線 御成門駅 出口A2またはA3 徒歩3分

都営浅草線・大江戸線 大門駅 出口A4 徒歩4分

ホームページ Homepageのご案内

自工会インターネットホームページ [info DRIVE]

<http://www.jama.or.jp/>



●自工会会員各社のホームページアドレス

いすゞ自動車(株)	http://www.isuzu.co.jp/	富士重工業(株)	http://www.fhi.co.jp/
川崎重工業(株)	http://www.khi.co.jp/	本田技研工業(株)	http://www.honda.co.jp/
スズキ(株)	http://www.suzuki.co.jp/	マツダ(株)	http://www.mazda.co.jp/
ダイハツ工業(株)	http://www.daihatsu.co.jp/	三菱自動車工業(株)	http://www.mitsubishi-motors.co.jp/
トヨタ自動車(株)	http://www.toyota.co.jp/	三菱ふそうトラック・バス(株)	http://www.mitsubishi-fuso.com/
日産自動車(株)	http://www.nissan.co.jp/	ヤマハ発動機(株)	http://www.yamaha-motor.co.jp/
日野自動車(株)	http://www.hino.co.jp/	UDトラックス(株)	http://www.udtrucks.co.jp/

●自工会会友のホームページアドレス

日本ゼネラルモーターズ(株) <http://www.gm-japan.co.jp/>

●主な自動車関係団体のホームページアドレス

一般社団法人 日本自動車部品工業会	http://www.japia.or.jp/	一般社団法人 自動車再資源化協力機構	http://www.jarp.org/
一般社団法人 日本自動車車体工業会	http://www.jabia.or.jp/	一般社団法人 日本自動車整備振興会連合会	http://www.jaspa.or.jp/
一般社団法人 日本自動車機械器具工業会	http://www.jamta.com	一般財団法人 日本モーターサイクルスポーツ協会	http://www.mfj.or.jp/
公益社団法人 自動車技術会	http://www.jsae.or.jp/	一般社団法人 全国レンタカー協会	http://www.rentacar.or.jp/
一般財団法人 日本自動車研究所	http://www.jari.or.jp/	自動車基準認証国際化研究センター	http://www.jasic.org/
一般財団法人 日本自動車研究所 JNXセンター	http://www.jnx.ne.jp/	一般社団法人 日本中古自動車販売協会連合会	http://www.jucda.or.jp/
一般社団法人 日本自動車販売協会連合会	http://www.jada.or.jp/	公益社団法人 全日本トラック協会	http://www.jta.or.jp/
一般社団法人 全国軽自動車協会連合会	http://www.zenkeijikyoo.or.jp/	一般社団法人 全国自家用自動車協会	http://www.disclo-koeki.org/02b/00479/index.html
一般社団法人 日本自動車会議所	http://www.aba-j.or.jp/	一般社団法人 日本自動車リース協会連合会	http://jalnet.jp/
一般社団法人 日本自動車連盟	http://www.jaf.or.jp	公益社団法人 日本バス協会	http://www.bus.or.jp/
日本自動車輸入組合	http://www.jaia-jp.org/	公益社団法人 全国通運連盟	http://www.t-renmei.or.jp/
一般社団法人 自動車公正取引協議会	http://www.aftc.or.jp/	一般社団法人 日本自動車タイヤ協会	http://www.jatma.or.jp/
一般社団法人 日本二輪車普及安全協会	http://www.jmpsa.or.jp/	一般社団法人 自動車用品小売業協会	http://apara.jp/
公益財団法人 日本自動車教育振興財団	http://www.jaef.or.jp/	自動車税制改革フォーラム	http://www.motorlife.jp/
公益財団法人 自動車製造物責任相談センター	http://www.adr.or.jp/		
公益財団法人 自動車リサイクル促進センター	http://www.jarc.or.jp/		

編集後記 Editor's Notes

◇社内報の編集で、昔のクルマの写真を使うことがある。写真棚から該当する写真を探すが、似たような写真があるとよく見比べても区別がつかなかったり、どこがマイナーチェンジしたのかわからないときがある。

◇それに比べて子どもの眼力はすごい。親が新車を購入早々ぶつけてしまい、こっそりとまったく同じクルマに代替したのだが、子どもはすかさずタイヤを指差して「ここが違う！」と指摘する。プラ

ルールでもミニカーでも、顔がちょっと違うだけでも気づいてしまう。その眼力を私にもわけてほしいものだと思ってしまう。

◇一年ずつ年をとっていくにつれ、自分の体力だけでなく視力の衰えも感じる。子どもの眼力には到底かなわないが、歩行者として、運転手として、助手席の同乗者として、安全をよく確認し、事故のないクルマ社会をめざしたいと思う。(npgn)

JAMAGAZINE編集委員 (会報分科会)

分科会長：日産自動車(株)/志水純之

分科会委員：いすゞ自動車(株)/金子恭子、川崎重工業(株)/小池田達郎、スズキ(株)/望月 英、ダイハツ工業(株)/中大路康太、トヨタ自動車(株)/三好幸子、日野自動車(株)/手塚英信、富士重工業(株)/川原麻美、本田技研工業(株)/岡田友博、マツダ(株)/矢野圭子、三菱自動車工業(株)/稲田 開、三菱ふそうトラック・バス(株)/品田善之、ヤマハ発動機(株)/鎌田陽子、UDトラックス(株)/栗橋恵都子
自工会事務局委員：大上 工・藤巻篤史・吉野紀咲・林 公子・木村真帆

JAMAGAZINE 1月号 vol.48

発行日 平成26年1月15日
発行人 一般社団法人 日本自動車工業会
発行所 一般社団法人 日本自動車工業会
東京都港区芝大門1丁目1番30号
日本自動車会館
郵便番号 105-0012
電話 03(5405)6119 (広報室直通)
印刷 こだま印刷 株式会社

©禁無断転載：一般社団法人 日本自動車工業会

いっまでも遊んでいられた。
早く、運転してみたかった。

わけもなくクルマが好きだったあの頃と、

クルマは何ひとつ変わらない。

運転の純粹な楽しさ。

風を切って走る気持ちよさ。

どこまでも行ける自由。

LOVE A CAR AGAIN.

クルマは、夢を見せてくれる。

今も、これからも。



安全運転で楽しいドライブ!!

クルマの正しく安全な使い方については <http://www.anzen-unten.com>

JAMA 一般社団法人 日本自動車工業会
JAPAN AUTOMOBILE MANUFACTURERS ASSOCIATION, INC.

〒105-0012 東京都港区芝大門 1-1-30 日本自動車会館



JAMA

JAPAN AUTOMOBILE MANUFACTURERS ASSOCIATION, INC.

自工会インターネットホームページ「info DRIVE」URL <http://www.jama.or.jp/> 自動車図書館 TEL 03-5405-6139